

S (音響・音感) の評価

SMLの考え方は【診断】や【処方】にシステムとしてある程度合理性のある検証された事実に基づき構成された【評価項目】や【指導課題】を表やデータベースとして使用するという事です。私の考え方は【始めに評価ありき】で、指導の対象や相手の状態をまず評価してそれに基づき指導内容や指導方法を決定します。医者がまず検査をするようなものです。その検査項目は大雑把に次のように考えます。まず【Sのレベル】は音響・タイミング・音程・和音・記号の観点で【単音】と【組み合わせ】について次のように項目を設定します。

音響・聴覚の項目

| ボリューム | テンポ | 音程 | 重なり | 読譜 |
|----------|-------|-------|------|--------|
| ヴェロシティ | 拍子 | 音階 | 協和音程 | 記譜 |
| スペクトラム | 分割 | 調性 | 和音 | コードネーム |
| エンヴェロープ | 連結 | 主音 | 声部 | 和音記号 |
| モジュレーション | 省略 | 属音下屬音 | 省略 | 転回型 |
| 楽器 | アクセント | 転調 | | |

これを簡単に統合整理すると次のようになります。

- ┌①音高弁別または識別の能力。
 - | (1) 単音の名前が言える。
 - | (2) 単音の音高比較ができる。
 - | (3) 音程の識別ができる。
 - | (4) 和音の種類と違いが言える。
- ┌②音量の弁別または識別の能力。
 - | (1) 絶対音量が言える。
 - | (2) 音量の比較ができる。
 - | (3) 音量の変化が分かる。
- ┌③音色の弁別または識別の能力。
 - | (1) 音色の特徴が言える。
 - | (2) 音色の比較ができる。
 - | (3) 音色の変化が分かる。
- ┌④音長の弁別または識別の能力。
 - | (1) 絶対音長の弁別。
 - | (2) 音長の比較ができる。
- ┌⑤音の記憶能力。
 - | (1) 単音の記憶と再生。
 - | (2) 音程の記憶と再生。
 - └ (3) 和音の記憶と再生。

音響と聴覚のレベル

シーショア (Carl Emil Seashore U.S.A.) という有名な学者がシーショア・テスト (1919) という音楽性のテストで評価しようとしたのは次の6つです。

- ・音高識別力 (Pitch)
- ・音量識別力 (Loudness)
- ・リズム識別力 (Rhythm)
- ・音長識別力 (Time/Duration)
- ・音色識別力 (Timbre)
- ・音記憶力 (Tonal memory)

彼は音楽を素材とした実音を使ったテストにこれらの能力を検査する方法を埋め込みました。

このような Musical Aptitude Test と呼ばれる音楽的能力測定のテストがいくつかありますが、有名なものとして、ゴードン (Gordon, Edwin) のものがあります。

1965年に発表された Gordon Musical Aptitude Profile と呼ばれるテストは現在入手できる最良のテストとして有名で、TEST(T), TEST(R), TEST(S) の三つから成り、それぞれ (T) は音のイメージ (メロディとハーモニー)、(R) はリズムのイメージ (テンポと拍子)、(S) は音楽的感受性 (フレーズとバランスと様式) の3つのカテゴリーについて小学校の4~5年生を標準として検証された標準テストです。このカテゴリーは筆者の考えているものと大変よく似ています。他にも以下のようなもの有名です。

K-D テストは Kwalwasser-Dykema Music Tests と呼ばれヤコブ・クワルワッサーとピーター・ダイケマが共同で1930年に開発しました。このテストにはシーショア・テストと同じような、音の高さ、音の強さ、音の長さ、リズム、音色、音記憶の尺度の他に、音の運動、メロディの鑑識、音高イメージ、リズム・イメージの4つが追加されています。しかし、標準テストとしての信頼性は極めて低いことでも有名です。後に1953年、クワルワッサーは一人で Kwalwasser Music Talent Test と称するわずか10分間のテストを発表しますが、短かすぎるため信頼性がなく年長の子供にはやさし過ぎるという欠点があります。

Drake Music Tests は Raleigh Drake によって1954年に完成され、以後30年以上にわたって使用されてきた実用的なテストですが、それが最も効果を発揮するのは拍子やテンポを保持する能力の測定についてです。ひとつの例を挙げると、始めにトン・トン・トン・トンとあるテンポでメトロノームを鳴らし、そのあとしばらく音のしない空白があって再びトンと鳴るのは最初から数えて何拍目かを答えるような問題で、空白の間正確にテンポを保持する能力を要求されます。この問題も高度になると空白の間に別のテンポのメトロノーム音が妨害音を発する等なかなか手のこんだこともやります。

Oregon Music Discrimination Tests はオレゴン音楽弁別テストとも呼ばれ、1930年から実施され1950年代にレコードが販売中止になるまでかなりの期間「鑑賞力」の測定に用いられました。このテストでは実際によく知られた作曲家の作品を使用し、原曲とそれを歪曲したものとを比較してどちらが好きかを答えると共に、その曲のどの要素が変奏されたかを判定するものであります。

Wing Standardised Tests of Musical Intelligence はウィング音楽的知能標準化テストまたはウィング・テストと呼ばれ、1948年頃に完成した認知型テストと「すべての音楽家が芸術に関心があるという人すべてに見出したいと願うであろう基本的な素養」つまり鑑賞力を測定する目的で開発されました。

後にベントリーがこのテストを批判する目的で実験を実施し、1955年の論文の中で「指導のために個人個人の資質の非常に決定的な分析が望まれる場合には最も有効である」と述べているように、7つからなるこのテストの最初の3つは評価されています。

テスト1は和音分析、2と3は音高変化と記憶、4～7はリズム、ハーモニー、ダイナミック、フレージングの鑑賞力です。特にフレージング・テストは問題作成者の主観や価値観がからむという問題がありますが音楽的グループと非音楽的グループを弁別するのには大変有効です。これはゴードン・テストが同じ曲（ポリフォニー）を異なるフレージングでいくつか聞いた後で、どのフレージングが最も音楽的であるかを答えるのとは異なり、一对の単旋律のフレージングが同じか否かを答えるものです。

1958年にはThayer Gaston がGaston Test of Musicality なるものを出版しました。テストは40項目から成り、最初の18項目は音楽についての興味をアンケート方式で探ると言うのが他のテストと異なるところで興味深いものを感じますが、少しやさし過ぎるのと客観性の不足が欠点です。

Whistler&Thorpe Musical Aptitude Test はピアノの生演奏で実施されるリズム、音高、メロディの能力を測定するもので10才から16才を対象に1950年に発表されましたが、リズムのテストを除いて信頼性ではやや劣るようです。

1966年にベントリー（Arnold Bentley）が7～8才の子供のために開発したBentley Measure of Musical Abilities は4つのテストからなり、1、音高弁別テスト、2、音記憶、3、和音分析、4、リズム記憶を測定する目的で14才位の子供にまで使えるものです。他のテストと同じで、一对のテキストがそれぞれ比較できることにより客観化しており信頼性は極めて高いものです。

その他のテストとして、ランディン音楽能力テスト、サックリー・リズム適性テスト、フランクリンの調性感音楽才能テスト、ジョージ・カムの美的判断力テスト、ファナムの音楽記譜法テストなどがあります。

さて、いろいろなテストについて述べてきましたが、「音楽的能力」とその分類を論ずるためには各種のテストが何を評価しようとしているのかを調べるのが近道だと思ったからです。

例えば【絶対音感】は優れた音楽的能力であるという未

だにそれを信じる人々のために任天堂のDSゲームに絶対音感育成ゲームが数種類用意されていますが、オランダの音楽教育学者レベスは音楽教育の内容を2つに分けて考え、それぞれが4つの要素からなる分類は次の通りです。

- (1) 音響＝音楽的能力
 - (a) リズム感覚
 - (b) 絶対音高感覚
 - (c) 協和音程の分析
 - (d) メロディーの把握と歌唱力
- (2) 音楽性 (Musicality)
 - (a) 相対的音高感覚
 - (b) 和声に対する認識と反応
 - (c) 暗譜、無伴奏譜によるピアノ演奏
 - (d) 創造的想像力

ここでレベスの言う『音楽性』は次のように定義されています。

“音楽性とは音楽の本質的意味を理解、経験し、その美的内容を楽譜の上で評価して、それを音楽的に発音しようとする要求とその能力である。”

ここでは音響認知能力として絶対音感があげられていますが、音楽性の一番要求するものとして相対音感をあげています。従って私も絶対音感の有無を必須の音楽的能力の項目には考えていません。

下表の13項目にすべて◎つまり完全に対応する音感は【完全音感】のみで、このスコアでは【絶対音感】のみでは×も含めてかなり良くないことが分かります。

この表のように何ができて何ができないかを知ることによってその人の能力や傾向を数値化することが合理的です。勿論その場合は総点よりも部分点の内容分析が大切になります。

音感別の音楽的能力

| | 混乱未熟音感 | 絶対音感 | 相対音感 | 完全音感 |
|--------------|--------|------|------|------|
| 単音の識別（絶対音） | × | ◎ | △ | ◎ |
| 音程の識別（相対音） | × | △ | ◎ | ◎ |
| 旋律から主音を抽出 | × | × | ◎ | ◎ |
| 旋律の構成音を抽出 | × | △ | ◎ | ◎ |
| 旋律に合う和声を考える | × | × | ◎ | ◎ |
| 旋律を移調する | × | △ | ◎ | ◎ |
| 和声を移調する | × | △ | ◎ | ◎ |
| CDから音を聞き取る | × | ◎ | ○ | ◎ |
| 楽譜から音を思い浮かべる | × | ◎ | ○ | ◎ |
| 無調の音楽が楽しめる | × | ◎ | △ | ◎ |
| 調性音楽の情報がわかる | × | × | ◎ | ◎ |
| 即興でセッションできる | × | × | ○ | ◎ |
| 旋律を変奏する | × | △ | ○ | ◎ |

◎＝優秀 ○＝良 △＝不確実 ×＝困難